

2007 年日韓教授統一思想研究会  
「現代文化と統一思想」

医者たちの臨死体験研究と霊界論

鮮文大学校 外国語大学 日本学科教授

柳 在坤

千葉県浦安市：一心特別研修院  
共催：統一思想研究院/PARP 後援：世界平和教授アカデミー  
2007 年 9 月 29 日—30 日

# 医師たちの臨死体験研究と霊界論

鮮文大学校 外国語大学

日本学科 教授 柳在坤

## 目次

- I 初めに
- II 医師レイモンド・A・ムーデイ・Jr. の典型的な臨死体験研究
- III 臨死体験の科学的研究
  - 1 ケネス・リングの科学的研究
  - 2 心臓専門医マイクル・B・セイボムの科学的研究
- IV 法医学者ジャニス・アマトウゾの神秘体験
- V 精神科医エリザベス・キューブラー・ロスの「死後の命は永遠」説
- VI 内科医師、李相軒先生の霊界メッセージと霊界論
- VII 終わりに

## I. 始めに

精神医学の大家、ユング・C.G(Carl Gustav Jung, 1875~1961)の臨死体験(1944年初め)が彼の自叙伝に記録されている。[U](#)彼が宇宙から眺めた地球の姿をアポロよりも以前、ソ連の宇宙飛行士であったユーリ・A・ガガーリン(1934~1968)よりも以前に描いていた。

ガガーリンが宇宙から地球を見て、「地球は青かった」と言うときまでは誰も宇宙から地球を見れば青く見えるということを知らなかった。さらに、ユングはガガーリンが見た位置(181~327 km)よりもはるかに高いところから見た地球の姿を正確に描いていた。

数千年前から西洋と東洋で臨死体験のような現象が記録され続けてきた。西洋のユダヤ教、キリスト教、イスラム教などの教義では、そのような体験を述べた者は弾圧されたし、超常現象の研究は禁止されてきた。禁止された理由は、超常現象が錯覚や迷信だからでなく、「悪魔の行為」や「人間の罪」を招くものとして否定されたからであった。

しかし、現在では多くの人たちは死や他界に対して深い信仰を持っている。たとえば、「死後には何もない」という信仰であり、「万人は死後、仏になるだろう」というものである。

今生きている人たちも肉体的には永遠に生きられない。多くの人たちは自分が死ぬのが明日なのか、あるいは、10年後なのか、20年後なのかを知らずに生きている。

ところで、元来、人間は生まれた瞬間から自身の「死」というものを孕んでいるのである。死は誰も避けて通れない問題である。

一般に「死」について非常に強い関心を寄せているにもかかわらずほとんどの人が「死」を話題にすることに強い抵抗を感じている。

その理由の一つは、主に心理学及び文化的要素に根ざす理由である。死に関する話題はタブーなのである。死を身近に体験すると、たとえ間接的な体験であっても、なぜか自分自身の死を意識しられないではいられなくなるし、自分自身の死が急に現実性を帯び、自分もいつかは死ななければならないのだと思ったりもするからである。

もう一つの理由は、ことばの問題である。人間のことばの大部分は、五感をなかだちにして体験できることを他者に伝達する役割を果たす。ところが大部分の人間にとって、死は意識をとまなう体験を超越したものである<sup>2)</sup>という。

臨死体験とは、事故や病気などで死にかかった人が、九死に一生を得て意識を回復したときに語る、不思議なイメージ体験である。

臨死体験は、死後の世界をかいま見た体験であり、魂の存在とその死後存続を証明するものであるとする「魂の離脱説」と、生の最終段階において弱りきった脳の中で起こる特異な幻覚に過ぎないとする「脳内現象説」に大きく分けられている。<sup>3)</sup>過去、臨死体験の説明としてこれまで考えられてきた他の解釈は、①無意識的に話をつくる、②自我感の喪失、③自己視的な幻覚、④夢、⑤事前の期待感、⑥薬物による幻覚ないしは妄想、⑦エンドロフィンの放出、⑧側頭葉の発作、⑨意識の変容状態など多様であった。

臨死体験の研究は、欧米では1892年にスイスの地質学者アルベルト・ハイム教授によって先鞭がつけられたとされている。その後、アメリカ心霊研究協会のヒスロップ(1918年)、イタリアの医師ボツアーノ(1923年)、イギリスの物理学者バレット(1926年)の研究が互いに無関係に発表され、1970年代の中頃までは、ごくわずかの例外を除いて研究は途絶えた。

日本では、臨死体験という現象に対して、NHK TVで放映された臨死体験の連続ドキュメンタリープログラム、その案内役を引き受けた評論家の立花隆が『文藝春秋』誌上で連載を始めることによって臨死体験の存在が広く知られるようになった。通俗的で一時的な熱狂によって始終一貫、それも次第に静かになって現在に至っている。<sup>4)</sup> 結局は科学的、組織的な研究はほとんどなされなかった。

韓国では2006年に「韓国の死の学会」(会長、崔ジュンシク<sup>5)</sup>梨花女子大教授)が設立された。

臨死体験の最近の流行は、1975年にエリザベス・キューブラー・ロスとレイモンド・A.ムーデー・Jr.という二人の医師があいついで著書を出版したことがきっかけになっている。ところがこれに対して、キリスト教会と医学界がかなりの反発を示した。

教会からの反発は、信者でなければ天国に行けるはずがないという教義があるのに、教会に通っていない者までが臨死体験の中で天国に行ったと言い、逆に熱心な信者でもそういう体験をしない者があるのは不都合であるという理由からである。

一方、医学界からの反発は、死の定義ができなくなるという理由からだった。臓器移植を考えると、この問題は深刻だった。

このように、アメリカでは、1970年代に入ってから、臨死体験を学問的研究の対象にしようという動きが芽生え、現在では、心理学者、精神・神経医者、脳生理学者、宗教学者、文化人類学者、哲学者など多方面の学者がこの研究に関心を寄せ、国際的な研究団体が組織され、研究誌まで発刊されるに至っている。

最近、西洋医学に中国医学、気功、心理療法などをプラスしたホリスティック医学を実践している日本ホリスティック医学協会会長の帯津良一医師は、"死を対象として取り込まないかぎり、どんな医学を持ってきても不満は残る"として、"死後の世界も取り入れていく医学であるホリスティック医学が、やはり次代の医学にふさわしい"<sup>6)</sup>と主張している。

## II、医師レイモンド・A・ムーディ・Jr. の典型的な臨死体験研究

臨死体験を最初に本格的に研究したのはアメリカのレイモンド・A・ムーディ・Jr (Raymond A. Moody, Jr)である。バージニア大学および大学院で哲学を学び、1969年に哲学博士号を取得。3年間、ノースカロライナ東部の大学で教壇に立った後、1972年にバージニア医科大学に入学、医学博士号を取得した。バージニア大学に在学していた1965年に初めて精神科医のジョージ・リチ-医師から死後の世界の体験談を聞く。その後、数多くの死後の世界の体験者に面接して、この特異な現象の研究を行った。

ムーディは臨死体験の事例を約150集め、そのうちの50例を選んで、詳細な聞き取り調査をして書いた『かいまみた死後の世界』のなかで、さまざまな体験者の体験例から、共通要素を引き出して構成した、一つの「モデル」、すなわち、典型的な臨死体験について次のように述べている。

わたしは瀕死の状態にあった。物理的な肉体の危機が頂点に達したとき、担当の医師が私の死を宣告しているのが聞こえた。耳障りな音が聞こえ始めた。大きく響き渡る音だ。騒々しくなるような音といったほうがいいかもしれない。同時に、長くて暗いトンネルの中を、猛烈な速度で通り抜けているような感じがした。それから突然、自分自身の物理的的肉体から抜け出したのがわかった。しかしこの時はまだ、今までと同じ物理的世界にいて、わたしはある距離を保った場所から、まるで傍観者のように、自分自身の物理的的肉体を見つめていた。この異常な状態で、自分がついさきほど抜け出した物理的な肉体に蘇生術が施されるのを観察している。精神的には非常に混乱していた。

しばらくすると落ち着いてきて、現に自分がおかれている奇妙な状態に慣れてきた。わたしには今でも「体」が備わっているが、この体は先に抜け出した物理的的肉体とは本質的に異質なもので、きわめて特異な能力を持っていることがわかった。まもなく別のことが始まった。誰かがわたしに力を貸すために、会いにきてくれた。すでに死亡している親戚とか、友だちの霊が、すぐそばにいるのが何となくわかった。そして、今まで一度も経験したことがないような愛と暖かさに満ちた霊、一光の生命一が現われた。この光の生命は、わたしに自分の一生を総括させるために質問を投げかけた。具体的なことばを介在させずに質問したのである。さらに、わたしの生涯における主なできごとを連続的に、しかも一瞬のうちに再生して見せることで、総括の手助けをしてくれた。ある時点で、わたしは自分が一種の障壁とも境界ともいえるようなものに少しずつ近づいているのに気がついた。それはまぎれもなく、現世と来世の境目であった。しかしわたしは現世に戻らなければならない、今はまだ死ぬときではないと思った。この時点で葛藤が生じた。なぜなら、私は今や死後の世界での体験にすっかり心を奪われていて、現世にもどりたいはなかったから。はげしい歓喜、愛、やすらぎに圧倒されていた。ところが意に反して、どういうわけか、私は再び自分自身の物理的的肉体と結合し、蘇生した。

その後、あのとときの体験をほかの人に話そうとしたけれど、うまくいかなかった。まず第一に、想像を絶するあの体験を、適切に表現できる言葉が全然見つからなかった。それに、苦勞して話しても、物笑いの種にされて

しまった。だからもう誰にも話さない。しかし、あの体験をしたおかげで、わたしの人生は大きな影響を受けた。特に、死ということについて、中でも、死と人生との関係に関するわたしの考え方に、大きな影響を受けた。<sup>2</sup>

ムーデイ博士は、死の体験に共通するさまざまな段階と出来事について、次の 15 項目にまとめている。ただし一人の人の体験に全部の項目が入っているわけではない。人によってどの項目にいくつ該当するかは異なるのである。

1) **ことばでは表現できない** — 死後の世界に踏み込んだ人の体験は、一般社会の体験を越えたものである。人間の言語の不完全生。

2) **死の宣告が聞える** — 担当の医師とかその場に居合わせた人たちが、自分の死を宣告しているのを聞いた死の体験者は非常に多い。

3) **心の安らぎと静けさ** — 多くの人が、死の体験の最初の段階で、非常に心地のよい感じがしたと述べている。

4) **耳障りな音** — 死んだとき、あるいは、死に瀕しているとき、さまざまな聞きなれない音が聞こえたと報告している。

5) **暗いトンネル** — 一種の暗い空間の中を、猛烈な速度で引っ張られていく感じがした。

6) **物理的肉体を離れる** — 突然、まるで傍観者のように、離れたところから自分自身の肉体をみられるようになる。物理的肉体を離れた後に、自分に別の肉体が備わっていることに気づいた。

7) **他者との出会い** — 自分のそばに自分以外の霊的生命がいることに気づいた。霊的生命がそばにいるのは、死につつある人間が死後の世界へ容易に移行できるようにするためである。

8) **光の生命** — 非常に明るい光との出会い。この光は単に人格を備えた生命であるばかりでなく、極めて明確な個性を持っている。愛と温情。キリストである。天使である。

9) **省察** — 光の生命の目的は、死後の世界にふみこみつつある人間をその全生涯に関する省察にいざなうことにつきている。映像を見ているとき、光の生命は人生において二つのことが重要であると力説する。すなわち、他人を愛することを学ぶこと、知識を身につけることの、二つである。

10) **境界あるいは限界** — 水域、白色の霧、ドア、野原を横切る柵、線など、死の体験の最中に、ある種の境界とも限界ともいえるものに接近した。

11) **蘇生** — 死後の世界に深くふみこみ、光の生命に出会った人は、現世に戻りたいという気持は消え去り、物理的肉体の中に再び戻ることには抵抗する場合がある。

12) **死の体験を話す** — この種の体験をした人たちは、自分自身の体験の真実性と重要性を確信しているものの、現代社会は、共感と理解とをもってこの種の報告を受け入れる環境ではないということを心得ている。その体験を他人に話そうとすると、懐疑的な眼と理解の欠如にぶつかる。

13) **実生活に与える影響** — 死後の世界の体験が、体験者本人の個々の実生活に及ぼしている影響は、ひそやかで内面的である。多くの人が、死後の世界を体験したために、究極的

な哲学上の問題について、以前よりも深く考え、より注意を払うようになったし、自分の人生の幅と奥行きが深くなったように思うとしている。

14) **死に対する新しい考え方** ー 死後の世界の体験は、物理的な死に対する心構えにも大きな影響を及ぼしている。とりわけ、死んだらそれっきりだと考えていた人たちに対し大きな影響を与えている。ほとんどすべての人が、もう死を恐れてはいないと言っている。死を一つの段階から別の段階への移行、あるいはより高度な意識ないしは生命への入り口だととらえている。

15) **確証** ー かなり長い時間、物理的肉体から離れていて、その間に物理的世界における多くの出来事を目撃していたと報告している人は多い。物理的肉体をぬけでている間に体験者本人が目撃したことは、相当程度まで確認できる。

『続かいまみた死後の世界』でムーデイは新しい事実として次の4項目<sup>8)</sup>を挙げている。

1) **全知全能感** ー 体験者が全知全能感を得たように思えた瞬間があった。この感覚は言葉では正しく表現し得ないものであり、物理的肉体に戻った後はこの全知全能感は喪失してしまった。

2) **光あふれる場所** ー 「天国のような」と呼ぶのがふさわしい場所を見た。聖書の中の天国の描写とよく似ている。

3) **さまよう靈魂** ー ①霊がこちら側のある特定のもの、人、あるいは習慣に縛られているように思えた。②この霊たちは、輝いている他の霊に比べて、ごく限られた範囲の意識しか持ち合わせていないような、薄暗い霊であった。③この「灰色の霊た」は、動きがとれなくなっている原因である問題が解決されると、そこを離れていくようだ。

4) **超自然の救い主** ー 何か霊的な力に助けられて、肉体的死から救済された。その後人生観が変わり、信仰が強まった。

「死にゆく過程の五段階」説を称えたエリザベス・キューブラー・ロス精神科医は、「数多くの人を啓蒙し、過去2千年にわたる人類の教え、すなわち死後にも生命が存在することを立証してくれるのは、本書を通じてムーデイ博士が提示したような研究である」とし、「瀕死の患者が臨床的に死を宣告された後も、自分が置かれている環境を自覚していることは明らかである。このことは私自身の研究結果ともびつたり一致する」と述べている。さらに今後、ムーデイ博士がタブー視されている分野の研究をあえて行うことによって、立場を危うくされるという危惧を抱いている聖職関係者からの批判と、この種の研究を「非科学的だ」と見なす科学者と医師からの批判を受けるだろう<sup>9)</sup>と予言している。

ムーデイ博士が実際に受けた批判とそれに対する彼の考えは次の通りである。<sup>10)</sup>

1) 教会の革新派に属する人たちからでた批判；

教会の役割は本来、倫理的なものであり、社会改革を促進し、社会正義をうちたてることにある。この神学上の立場から、肉体の死後の生に関心をもつとは、時代遅れである。(革新派の聖職者たちが、死後の生命への関心は薄れつつある、あるいは消えて行くべきであると主張。)

ムーデイ医師が同調できないいくつかの点。

①肉体的死の後の生命があるかいなかという問題がだんだん小さくなってきて、消えつつあると感じているという聖職者には、驚かざるをえない。

②社会に対する関心と、死後の世界への興味が、どうして互いに相容れないのか苦しむ。

③死後の世界を強調すれば、現実の問題から注意をそらすことになる、という考え方である。

## 2) 保守派の聖職者たち；

死後の体験は、悪魔的な力によって引き起こされると主張。

その体験によって、神により近づいたように感じたり、信心深い生活をしたいなどの結果をもたらすのであれば、それは正当なことと見なされる。（聖職者でもあり、神学者であるムーデイの友人のいく人かの答え）

## 3) 自分達が小心者であると表明したグループ；

死後の世界のことは、医学の領域のことで、医師にまかせておくべき現象であるから、自分達が口をはさむのは適当ではない。

死後の体験は医学的現象であるから、それについては議論したくないという聖職者がいる。その反対に、それは患者の信仰生活の域に属することだから、患者とそのことについて話さないと言った医師もいた。

## Ⅲ、臨死体験の科学的研究

臨死体験の本格的な研究が世界中ではじまるのは、ムーデイの『かいま見た死後の世界』（1975）に刺激されてであった。

ムーデイの研究の基本的な方法論は、臨死体験例を広範囲に集め、その内容を分析することによって、臨死体験の構造的な特徴を抽出していくというものだった。その分析にあたって、データを統計的に処理するというようなことはしなかった。

ムーデイ以後の研究者は、このような批判を避けるため、いずれも科学的により厳密なデータを集め、それに統計的処理をほどこすことで、定量的な議論を展開した。

リングとセイボムによる、科学的にデータを収集し処理した二つの研究によって、臨死体験の存在そのものはもはや疑えないということが一般に認められるようになった。そして、この体験が、立派に科学的研究の対象になりうるということが、広く認識されるようになった。ケネス・リングは本文でとりあげる医師でなく心理学教授であるが、臨死体験を最初に科学的に研究したので本文でとりあげることにした。

### 1、ケネス・リングの科学的研究

臨死体験の本格的な研究が世界中ではじまるのは、ムーダイの『かいま見た死後の世界』(1975) に刺激されてであった。

ムーダイの研究の基本的な方法論は、臨死体験例を広範に集め、その内容を分析することによって、臨死体験の構造的な特徴を抽出していくというものだった。その分析にあたって、データを統計的に処理すると言うようなことはしなかった。

ムーダイ以後の研究者は、このような批判を避けるため、いずれも科学的により厳密なデータを集め、それに統計的処理をほどこすことで、定量的な議論を展開した。

1977年にケネス・リング(Kenneth Ring)心理学教授が最初に科学的研究を行った。ケネス・リングの研究は、死にかかったが蘇生したことのある102名全員に1年3ヶ月かけてインタビューしたところ、うち49人、48%の人が臨死体験していた。

リングは独自の調査をもとにして、臨死体験の要素を分類し直し、かつそれぞれの項目に重要性の比重にしたがって点数をつけ、〈コア経験比重指数〉というのをつくった。要素分類と点数は次の通りである。

|  |      |
|--|------|
| 1) 自分は死んだという主観的実感                          | 1点   |
| 2) 安らぎ、気持がいいなどの感じ                          | 2~4点 |
| 3) 身体と分離した感じ                               | 2~4点 |
| 4) 暗いところへ入っていく感じ                           | 2~4点 |
| 5) 誰かに会う/誰かの声を聞く                           | 3点   |
| 6) 自分の人生をふり返る                              | 3点   |
| 7) 光を見る、あるいは光に包まれる                         | 3点   |
| 8) 美しい色を見る                                 | 1点   |
| 9) 光の中にはいる                                 | 4点   |
| 10) 目に見える <del>目</del> 霊魂 <del>目</del> に会う | 3点   |

リングは上のように10の要素体験に分け、その体験の深さにしたがって、合計29点満点の得点をつけ、6点以下の者は体験していないに等しいとして切り捨ててしまった。主要要素体験について、その体験率を示すと次のようになる。数字は全調査対象者に対する%である。

|                   |     |
|-------------------|-----|
| *安らぎに満ちた気持よさ      | 60% |
| *体外離脱             | 37% |
| *暗闇(トンネルなど)の中にはいる | 23% |
| *光を見る             | 16% |
| *光の世界に入る          | 10% |
| *人生回顧             | 12% |
| *何らかの超越存在との出会い    | 20% |
| *死んだ親族、知人との出会い    | 8%  |

これらの体験率が、体験者の何らかの属性と関係するかどうかのクロスチェックが行われた結果、性別、社会的階層、人種、既婚か未婚か、宗教、臨死体験についての予備知識の有無などとは全く関係がないことがわかった。臨死体験はほぼ万人に普遍的に起こりうる現象と考えられるようになった。



科学的に収集され、科学的に分析されたデータによって、ムーデ井の説を裏付けたケネス・リングのこの研究結果は、1980年に『Life at Death』（『いまわのきわに見る死の世界』）という本にまとめて発表された。

## 2 心臓専門医マイクル・B・セイボムの科学研究<sup>1)</sup>

マイクル・B・セイボム(Michael B. Sabom, M. D.)は心臓専門医として開業するかたわらアトランタにあるノースサイド病院とセント・ジョセフ病院に勤務。レイモンド・ムーデイの『かいまみた死後の世界』を読み、科学的分析を行っていない点に疑念を抱いたことから臨死体験研究にはいる。以来20年にわたり臨死研究における第一人者として研究を続けている。

1976年春、『かいまみた死後の世界』を初めて通読したとき、セイボムは、臨死体験を一般大衆やマスコミの空想をかきたてるよう仕組まれた「空想的な物語」の一つと考えた。

臨死体験の説明としてこれまで考えられてきた他の解釈

- 1) 無意識的作話
- 2) 自我感喪失
- 3) 自己視的幻覚
- 4) 夢
- 5) 事前の期待感
- 6) 薬物による幻覚ないし妄想
- 7) エンドルフィンの放出
- 8) 側頭葉発作
- 9) 意識の変容状態

科学的方法の大きな問題点は、真理を間違いなく記述しているとされる事実群であっても、実際には、一定の枠組みのなかでしか事実としての地位を与えられていない理論的存在に過ぎない。

ムーデイの著書『かいまみた死後の世界』から浮かび上がった、臨死体験に関する基本的な6項目の疑問点とそれに対するセイボムの解答はこの表の通りである。

<表一> 臨死体験に関する疑問点と解答

|   | 疑問点   | 解答                                 |
|---|---|------------------------------------|
| 1 | ムーデイが述べているような臨死体験は、臨死状態及び意識不明に陥りながら蘇生した、私たち自身の患者で | 臨死体験は、臨死状態にある人間に普通に起こるものであることがわかる。 |

|   |                                  |   |
|---|----------------------------------|---|
|   | も実際に起こっているのでしょうか。                |   |
| 2 | こうした臨死体験には、一定のパターンが見られるのでしょうか。   | 本研究では、臨死体験の有無をあらかじめ知らずにインタビューした臨死生還者の40%ほどに臨死体験のあることがわかった。  |
| 3 | 臨死体験はどの程度の頻度で起こるか。               | 年齢、性別、人種、居住地、居住する市町村の規模、教育年数、職業、宗教、教会に通う回数などの個人的背景は、臨死状態の中で臨死体験が起こるかどうかとは無関係のようであった。また、臨死状態に陥る以前に臨死体験に関する知識を持っていても、臨死体験が起こりやすくなる傾向は見られなかった。                 |
| 4 | 臨死体験一誰にどのような状況で起こるのか。            | 臨死を招いた危機状況の内容（つまり心停止、昏睡状態、事故）は、臨死体験が起こるかどうかとは無関係であった。しかし、1分以上にわたって意識不明の状態を病院の中で続け、何らかの蘇生処置を受けた者では、臨死体験を起こす者が、それ以外の者と比較すると多かった。                              |
| 5 | 臨死体験の内容は、個人的背景や臨死状態によって異なるであろうか。 | 10項目の要素を基準に考える限り、臨死体験の内容は、体験者の個人的社会的背景が異なってもかなり一定していたが、女性群と労働者・兵士群では、9番目の要素（「他者との出会い」）を報告することが、男性群や専門職従事者群よりも多かった。また臨死体験の内容は、臨死の危機状況が異なっても、それによる違いは見られなかった。 |

|   |  |
|---|--|
| <p>6 臨死体験は、体験者自身の死に対する不安や来世観に影響を及ぼすか。</p> | <p>臨死状態から生還した後、臨死体験群では、死に対する不安が減少し、来世信仰が強まったと回答しているが、これは、臨死体験がなかった群の回答とはかなり異なっている。また、死に対する不安が臨死体験の有無により異なることについては、テンプラーおよびデイクスタインによる二通りの死の不安尺度によっても裏づけが得られた。</p> |
|---|--|

セイボムは、少なくとも、対象となる患者が精神的に健康であることがはっきりしないかぎり、その患者の証言を研究対象とはしないことにした。

ムーデイが分類している 10 項目の特徴に沿って検討できるように、各体験の内容を十分聞き出すことであった。

セイボムは、1976 年 5 月から 1981 年 3 月までの 5 年間の間に、死にかつたが蘇生した経験がある患者 78 名にインタビューした。そのうち 66 名は一時的心停止を起こした患者である。臨死体験があったのは 78 名のうち、33 名だった。体験率は 42%であった。

要素別の体験率は、33 名の体験者のほかに別のルートから得た 28 名の体験者のデータを加えてある。調査結果は、総数 61 名に対する%である。

- |                  |      |
|------------------|------|
| 1) 自分が死んだという感じ   | 92%  |
| 2) 主な感情内容        | 100% |
| 3) 肉体から離れる感じ     | 100% |
| 4) 事物や出来事を見聞きしたか | 53%  |
| 5) 暗い空間          | 23%  |
| 6) 走馬灯的体験        | 3%   |
| 7) 光             | 28%  |
| 8) 超越的世界に入ること    | 54%  |
| 9) 別の存在との出会い     | 48%  |
| 10) 肉体に再び戻ること    | 100% |

本研究で対象にした患者が語った臨死体験を検討すると、それぞれに共通する特徴がいくつか浮かび上がってくる。①筆舌に尽しがたいこと、②時間を超越した感じ、③現実の出来事のような感じ、④自分が死んだという感じ、⑤支配的な感情として、穏やかさ、安らぎ、落ち着きと言った感情が支配的である、⑥肉体から離れる、などである。

1、自己視型臨死体験 ①「明確かつ明瞭」に自分の肉体を見る、②自分の周辺でかわされていた会話が聞こえた、③他者に対する意志伝達の試み、④思念の旅、⑤肉体に戻る、⑥人に自分の体験を話す、

2、超俗型臨死体験(臨死体験がさらに深まった段階) ①暗い世界ないし空間、②光、③この世のものならぬ世界、④他者との出会い、⑤自分の一生を振り返る、⑥肉体に戻る

自己視的要素のみの臨死体験 33%

超俗的要素のみの臨死体験 48%

複合型の臨死体験 19%

セイボムは、医者として臨死体験の意味<sup>12)</sup>を次のように考えている。

医師であり科学者であるセイボムとしては、臨死体験は最終的な肉体の死の瞬間に訪れるはずの出来事と同じものだと断言することはできない。こうした体験は、生命が燃え尽きる瞬間に起こっている。こうした体験を報告した者は、死んだ後に蘇ったわけではなく、死の直前で救われたのである。したがって、きわめて厳密に考えると、こうした体験は、臨死との出会い体験であって、死そのものとの出会いではない。セイボムは、臨死体験を心と脳が分離した証拠ではないかと考えているので、こうした現象がなぜ臨死の瞬間に起こるのか不思議でならない。物理的な脳から分離する心は、ある宗教的教義によれば、肉体の死後にも生存するとされている「魂」と、本質的に同一のものだという可能性があるのであろうか。

どうやらこれは、臨死体験から生ずる究極的な疑問のようである。科学的事実や理論が宗教的教義や見解と交差するのはここ、臨死の時点なのである。

医師としてセイボムは、こうした体験が起こった医学的背景を検討し、身体的状態からすると生き続けることは絶望的と思われる患者が、少なからず生き続けていることに、心から驚嘆したのである。

またセイボムは、患者が意識不明で臨死の状態に陥っている間に肉体から抜け出したという話しにも同じように関心をそそられた。このような出来事に対してセイボムは、「科学的に検討」する態度を示したというよりは、こうした物語が繰り返られるにつれ、喜びや悲しみの涙を流しながら耳を傾けたのである。

科学を真剣に追求している者はだれであれ、宇宙の法則のなかに神の霊が顕在していることを確信するに至る。神の霊は人間の霊をはるかに凌ぎ、神の霊の前に人間は、自らの力のささやかなることを知り、謙虚にならざるを得ないのである。

臨死体験をした者の大多数が繰り返し認めてきたものこそ、アルバート・アインシュタインが言った、まさにこの「神の霊」なのである。

#### IV 法医学者アマトウズの神秘体験

ジャニス・アマトウズ(Janis Amatuzio)は、解剖病理、法医学病理、臨床病理の医師である。ミネソタ大学を卒業後、ヘネピン郡メデイカルセンター、ミネソタ州メデイカル・エグザミナー、オフィスに勤務。ミッドウェスト法医学協会を創立し、検視官のサービスを提供するなどの活動を行う。米国の法医学の分野では、名の知れた権威者であり、死亡調査、法医学看護学、遺体防腐処置などのテーマにおける教育課程の開発にも携わっている。

内科医を父にもつ彼女は法医学者、死者の代弁をする医者であり、郡の検視官として、何年もの間、死亡現場や死体を調べ、検視解剖を行い、その記録をつけてきた。すなわち、死者の代弁をし、「何が起きたのか?」という疑問に答えなければならず、法廷、検察官、医者、とりわけ死亡した人の家族に対して、その答えをはっきりと科学的に説明しななければならない<sup>13)</sup>という。

アマトウズは「死」に対して、死は通過点であり、ひとつの状態から別の状態への変化に過ぎない。私たちが肉体以上の存在であることを深く確信するようになった。死は十二分に自分の生を生きること、この一瞬一瞬を大切にすること、人生において一番大切なもの、愛について思い出させてくれるものである。

アマトウズは死亡の調査というのは実は生の調査である。一人の人間がどのように生きて死んだのかに対して出来る限りすべてを知らせようと努力することである。死の研究は、頭ではなく心で理解することを要求してきたといい、宇宙の神聖な存在を知るようになったと述べている。また彼女は、霊魂は永遠に生き続けると信じており、愛する人は永遠に私たちのそばにいると信じるようになった。

アマトウズは患者とその家族、友だちなどを通して、臨死体験以外に神秘体験があると報告している。(＜表－2＞参照)

＜表－2＞神秘体験

|   | 患者名                             | 神秘体験   |
|---|---------------------------------|--|
|   | 病名                              |  |
| 1 | ジョ<br>ン・ガン<br>ナー<br>リヒター<br>症候群 | 40年以上も前になくなった兄と兄の友人がガンナー氏の見舞いに訪れ、とても楽しく話をして、旧交を温めた。<br>(慢性リンパ球性白血病の珍しい合併症) |

|   |                          |  |
|---|--------------------------|--|
| 2 | <p>ス タ イ<br/>ン 氏</p>     | <p>突然、自分の頭の上を通過して体を離れた。天井のほうから自分の体を見ていた。主治医と看護婦たちは、私のそばに走ってきて、蘇生術を始めた。…</p> <p>電器ショック。パドルが使われるたびに、私の体は飛び上がった。</p> <p>隣のベッドの男性が心臓停止。頭の上を通過して彼も体を離れた。</p> <p>私たちは、ただ思うだけで、互いに会話することができた。</p> <p>私たちは、天井に近いところから、下で起こっている混乱を見ていた。</p> <p>医者と話ができなかった。</p> <p>廊下を出ることを考えただけで、すっと壁を通過して出た。</p> <p>遠く離れたところに驚くほどの美しい光を感じた。それはとても明るくて、虹のすべての色よりももっと多くの色からなっていた。近づくと、喜びと畏敬、そして崇高さを感じた。</p> <p>光の中心が開き、円錐状のトンネルの中を進みながら、恍惚感を感じた。</p> <p>後にも先にも見たことがないものすごく美しい色に囲まれていた。</p> <p>私は、私にほほえみかけていた両親と叔母、そして愛犬を見た。</p> <p>私は、幸せと期待で満たされていた。この喜びの源のほうへと旅していくにつれ、すべてのことを理解し始めた。一瞬にして、自分の人生の目的を思い出し、それがどのようになされるのかを理解した。自分を取り巻いている愛に満ちた優しさに圧倒されていた。</p> <p>彼は、まばゆい光のほうへ行き、私は身体に戻った。医者に話したが、医者は私の話を無視した。</p> <p>&lt;この経験がスタイン氏の人生を変えたか?&gt;</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1、死ぬことがまったく怖くなくなった。</li> <li>2、大切なのは愛だけであり、物質的なものはまったく重要ではないと知った。</li> <li>3、日々、何かを学ぶよう努力するようになった。知識を得、それをを用いてこの世界を、よりよい場所にした。</li> </ol> |
| 3 | <p>グ レ ゴ<br/>リ ・ ベ ア</p> | <p>①母親のメアリーはグレゴリーのベビーシッターであっ</p>   |

|  |  |
|--|--|
| <p>- (22)<br/>自動車<br/>による<br/>死亡事<br/>故<br/>(1996)</p>   | <p>たシーラからの手紙を読んだ後、電話をかけた。</p> <p>グレッグが死んだ夜、「やあ、シーラ!」という大きな、でも " 耳には聞こえないような " 声で起こされた。ベッドに起き上がると、グレッグが隣に立っていた。彼は自分が家族や友人たちにとんでもない苦痛と悲しみを与えてしまったと動揺しているようだった。彼女が慰めると、消えてしまった。</p> <p>三日後、彼女は寝室いっぱいの優しい光と存在によって起こされた。息子のグレッグがベッドの足元に立っているのが見えた。</p> <p>(グレッグが生まれる二年前に癌で亡くなった) グレッグの祖母で、メアリーの母のベルヌがシーラにほほえみながら立っていた。</p> <p>②グレッグの死から 3 日目の夜、ガールフレンドのトリッシュの所も訪ねた。トリッシュは目が覚めると、グレッグがベッドの足元に立っているのが見えた。</p> <p>彼は、自分は大丈夫で、一人じゃない、「ここにはたくさんの方がいるんだ」と言った。</p> <p>①②を通して、母親のメアリーは息子がまだ私たちと一緒にいて、いつかまた会えることがわかった。</p> |
| <p>4<br/>マーク<br/>救命士</p>                                 | <p>マークが 10 才か 11 才だったある日、まるで誰かがベッドの上に座っているみたいに脚の上が重かったので、目を開けると、ひいおじいちゃんのオーレがベッドの端に座っていた。</p> <p>彼はそこに座って僕にほほえみかけ、脚をなでてくれた。「心配しなくていいよ、すべてうまくいくから」マークはとても満足し、安心した。</p> <p>医者からの電話で、ひいおじいちゃんのオーレは昨晚寝ているあいだに亡くなったことを知らされる。。</p>   |
| <p>5<br/>ラン<br/>デ<br/>イ<br/><br/>心<br/>筋<br/>梗<br/>塞</p> | <p>ランデイが亡くなった後、寝室のドアを通り抜けてカーソン婦人のところにやってきた。彼は光を放っていた! 彼は素的な微笑を浮かべて、ベッドのすぐそばまで歩いてきた。</p> <p>長い時間話した。- 子どもたちの将来について、財政的なことや、死亡診断書が出るまで売ることができない資産についても話した。</p> <p>彼は私の隣に座って、肩に手を置き、私の目から涙を拭いてくれながら、</p>  |

|   |                |   |
|---|----------------|---|
|   |                | <p>「僕たちの愛は永遠だよ。僕が必要なときには、ただ思い出してくれればいいんだ。そうしたら、すぐの君のもとに飛んでくるからね。」と言った。</p> <p>話が終わったとき、私は言いようのない気持で、夫の大きな愛に包み込まれていた。</p> <p>ランデイは、ベッドで私の隣に横になり、私の体を抱きしめてくれた。夫の体の重さと温かさが感じられた。</p>   |
| 6 | 最近任命された保安官     | <p>僕は一度溺れ死んだことがある。…</p> <p>そのとき、かなりの水をグイッと飲んでしまった。次の瞬間、突然、自分の体の上において、見下ろしているのに気づいた。あたり一面が美しい色に囲まれて、浜辺の方へと向かっていった。そのとき、突然、体に引き戻された。ボートの底に横たわる僕に、監視員が蘇生術を行い、水を吐いた。</p> <p>自分の体の上にいるとき、いろいろなものが驚くほど鮮やかで輝いていた。</p> <p>このことが起こってからは、僕は死について恐れていない。死ぬことは簡単です。重要なのは生きることです。</p>  |
| 7 | アマトウゾ法医学者の神秘体験 | <p>①28年前、愛する祖母が亡くなった翌朝、私は、まだ朝早い静けさのなかで目が覚め、ベッドの足元にいる祖母の存在に気づいた。</p> <p>祖母は、再び眠りにつくまで、その場所においてくれました。目が覚めたとき、私はとても安らかな気持ちと新しい意識を感じた。祖母がどこかで生きており、私たちの愛は永遠だということを、心の中で理解した。</p> <p>②突然、自分が寝ている体の上にいることに気づいた。</p> <p>次の瞬間、目が覚めるほどすばらしい場所にいました。</p> <p>私は、自分が光からなっており、とてもなじみがある場所において、光の存在たちに囲まれていることに気づいた。</p> <p>…信じられないほど幸せな気持だった。</p> <p>彼らは私を歓迎し、温かく、限らない優しさで抱きしめてくれた。…水しぶきを飛ばしながら、互いに愛を送り合い、驚くほど美しい光を送り合っていました。幸せと、笑いと、喜びに満ちあふれていた。すべてが完璧でした。私は人生の意味を理解した。このうえなくくつろぎ、満足し、心の奥底から平和な気持ちだった。</p> <p>&lt;①②を通して、アマトウゾ法医学者が絶対的な確信で理解できた内容&gt;</p> <p>1、自分が体だけの存在でないということ。</p> |



|  |   |
|--|---|
|  | <p>2、私たちは、深い、深遠なレベルでつながっているということ。</p> <p>3、私たちみんなが、愛によってつながっているということ。</p> |
|--|---|

アマトウズは亡くなった人が愛する家族から聞いたことや、自分自身の経験を通して、本人が目を見た以上のものがこの世には存在していると信じるようになったと述べている。

## V 精神科医エリザベス・キューブラー・ロスの「死後の命は永遠」説

エリザベス・キューブラー・ロス(Elisabeth Kübler-Ross, 1926~2004)は1926年、スイスのチューリッヒで生まれチューリッヒ医科大学に学び、1957年学位を取得。結婚後、渡米してニューヨークのマンハッタン州立病院、コロラド大学病院などをへて、1965年、シカゴ大学ピリングス病院で「死とその過程」に関するセミナーを始める。18もの博士号をもつ。末期患者を精神的に支える仕事、すなわち、「死の臨床という医学の分野で世界の第一人者である。1969年『死ぬ瞬間』の刊行<sup>14)</sup>と「死にゆく過程の五段階」説によって一躍世に知られ、あらゆる喪失体験からの癒しを助けるワークショップを精力的に開催した。同時に、自らの体験と2万件以上もの臨死体験例から知った「死後の真実」を人々に知らせるとい仕事に取り組んだ。2004年、78歳で亡くなる。

「死にゆく過程の五段階」説とは、重症の癌だという衝撃的な宣告をうけた患者が経ていく心の動きに共通するもの(①その事実をかたくなに否認、②怒りを激発、③取り引きを試み、④あきらめて悲嘆に沈む、⑤安らかに死を受容してこの世に別れを告げる)という五段階を経るのである。

後になってこれは、臨死の体験に限ったことではなく、その人にとってかけがえのない大切なものを喪失するときつねに体験する現象だということが明らかになった。

医者が活かすことでなく死ぬことに目を向けるなどというのは、当時としては異端視されかねない画期的な仕事だった。今日では終末期医療やホスピスの先駆者として高く評価されている。

ロス博士はまず、「神は無条件の愛であり<sup>15)</sup>、私たちは素朴でかつ美しく、またすばらしい人生を送るためにつくり出されている」と述べ、「幸福に生きるとは、基本的に愛するこ

とを学ぶことを意味し、私たちに最も必要なのは、無条件で人を愛し、愛されることができるようにならなければならないことである”と強調した。

次に、“毎日、世界中いたる所で人々が亡くなっているにもかかわらず、人間を月へと送って安全に戻ってこさせることのできるこの社会で、人間の死を定義する努力はしてこなかった”ことを省みている。そして、“肉体が死んでしまった後にもいのちが存在することを本当に知る人がどんどん少なくなったのは、おそらくここ百年ほど前からであり、私たちは、今や科学と技術と物質至上主義から、純粹で本物の新しい時代、すなわち、靈的な時代へと移行したようである”と述べている。

最後に、“私の本当の仕事は、死は存在しない<sup>16)</sup>ということをお皆さんに伝えることである”と述べるロス博士は、“死とはこの世での成長の最終段階である。死によってすべてが滅びるのではない。死ぬのは肉体だけである。自己、あるいは魂は永遠である<sup>17)</sup>”ことを強調した。この世に生まれてくるのが普通で、人類共通の過程であるのと同じように、死ぬこともまた人間としてのごく普通の過程なのである。

死とはただこの世から、痛みも苦しみもない別の存在へと移るだけのこと、すなわち、別の存在へのの誕生<sup>18)</sup>である。何千年もの間、私たちはあの世に関するものを「信じる」ように仕向けられてきた。しかし、私にとってはもはや信ずるかどうかの問題ではなく、知るかどうかの問題なのである。

たとえば、人間の肉体の死というのは、チョウがマユから出ていくのと全く同じで、肉体を脱ぐだけに過ぎない<sup>19)</sup>し、また、死とはただ、一つの家からもっと美しい家へと移り住むだけのことなのである。

ロス博士は、死を恐れない方法の一つとして、“死は存在しないことを知り、この人生で起こることはすべて肯定的な目的を持っているのだと知ることである”と述べている。死ぬ瞬間には次の図表のように三つの段階<sup>20)</sup>があるとした。

<表一 3>死ぬ瞬間の三つの段階

| 各段階  | 内 容  |
|------|--|
| 第一段階 | <ul style="list-style-type: none"> <li>.肉体的エネルギーが与えられている。</li> <li>.肉体をまとったこの人生、この時間は、私の全存在のうちで本当に短い期間である。</li> </ul>  |
| 第二段階 | <ul style="list-style-type: none"> <li>.精神的エネルギーが与えられている。</li> <li>.「亡くなった人」は自分が再び完全な状態に戻ったことを感じる。</li> <li>.目が見えなかった人はまたが見えるようになり、</li> <li>.聞くことや話すことができなかった人も、再びそれが可能になる。</li> <li>.だれも一人ぽっちで死ぬことはないということがわかる。</li> <li>.距離というもの存在しない。自分の望むところへ思ったとたんに移行できるのである。</li> </ul> |

|      |   |
|------|---|
|      | <p>.自分の体が再び無傷な状態に戻ったことを知覚し、<br/> .愛する人たちとで合うと、今度は、死ぬということはただの別の形のいのちへの移行に過ぎないということに気づく。</p>                                   |
| 第三段階 | <p>.第一段階や第二段階でもっていた意識や知覚はなく、その代わりに、認識力をもつことになります。<br/> .地上での人生で、いつ何を思っていたのか、事細かにわかり、<br/> .今までの行動や今まで話した一語一句まですべて思い出すのです。</p> |

ロス博士によると、人間は誰しもこの世に誕生した瞬間から、肉体の存在を終えて死に移行するまで、霊的な存在（ガイド）や守護天使の存在のもとにおり、死後生へと移行する際に手引きされており [21\)](#)、そしてまた、自分より先に死んでいた愛する人たちにもいつも出迎えられるという。

## VI. 内科医師、李相軒先生の霊界メッセージと霊界論

### 1. 李相軒先生の生涯

李相軒先生は1914年9月5日、咸鏡南道定平郡新上面禾洞里で儒学者の李スヨン先生の二男として生まれた。先生は、韓国東洋哲学会の元老であり、高麗大学アジア問題研究所を創設した李相殷博士の弟でもある。

李先生は高等普通学校の頃、反日感情に燃え、共産主義陣營で主導する民族主義運動に加わったが、延禧専門大専学校(現 延世大専学校セブランス醫科大學)に入學した先生は次第に共産主義の唯物論に懐疑を抱くようになったし、真の民族愛と人類愛とは何なのかに対して悩むようになった。

李先生はセブランス醫科大學を卒業後、セブランス醫大病院，元山救世病院，永同救世軍病院，忠北道立永同醫院，大韓警察病院などを経て、永同中央病院，李ソン内科病院を開業するなど、内科醫師の道を歩んだ。

李先生は醫師として勤務したが、思想的な遍歴を経て宗教に関心を傾けるようになり、1956年に統一教會に入教後、1958年頃 " 未來に統一思想の時代が来る。 " と語られたみ言葉や、36 家庭祝福を受けた後の 1962 年の文先生のご生誕前夜に、 " これからは共産主義理論に打

ち勝つ實力を養成しなければならない。 ” と語られたみ言葉を心に刻み、文鮮明先生の思想を體系化しなければならないと考えられた心境は次の通りである。

” 私の目に移った文鮮明先生の姿は、この世の人間の姿ではありませんでした。この方は驚くべき智慧の寶庫であり、限りなき憐憫の愛を備えておられる聖者であり、受肉された神であり、人類を救いにこられたメシアであったのです。その教えの一つ一つは実に玉のように財宝のようでした。これらの貴い玉をそのままにすればバラバラになってしまうようでした。玉を結わえてこそ財宝というように、私は先生の思想を体系化しようと決心しました。<sup>22)</sup> ”

文鮮明先生の思想である「統一思想」と「勝共理論」などを體系化された李相軒先生は国内外の教授及び各界の指導者たちに43回もの統一思想セミナーと7回にわたった勝共理論セミナー、そして500数回の學術講演會を主宰した。一方、國際科學統一會議(ICUS)での統一思想分科部門の名譽議長として既存の學問を統一思想の基盤の上に定着させるのに力を尽した。

學術セミナーや教授セミナーでいかなる質問であっても統一原理や統一思想のみ言葉をもって十分に答えられたが、質問がひっかかる部分は靈界に関するものであった。そこでいつかは靈界論を必ず執筆すると語られたそうである。1997年3月に國際統一思想シンポジウムを終えるや、李先生は昇華された。

『天聖經』によると、 ” 数多くの宗教が現れて靈界の事実を紹介したとしてもそれが一部分であり、その宗教の内容を中心に教えたものであり、全體を把握できなかつたものである。しかしながら、今や成約時代を迎えたために、神の許諾を受けて靈界全体の様相を地上に説明できる時代になったので、李相軒先生が靈界に行ったのである。すなわち、彼が靈界の事実をすべてくまなく地上に知らせるために、摂理のみ旨の中で行ったとみるのである。靈界全體を知らせようとすれば、神様の指示を受けることができなければならないし、つなげてあげなければならないのである。これをすべて体系化しなければならないのに、今まで靈界がそのようにできる基準に到達できなかつたのである。<sup>23)</sup> ” と、李先生が靈界に行かれた事情について明らかにしている。

李相軒先生は、 ” 地上にいた時、學術セミナーのたびごとに、靈界に対する質問があれば明快に答えられなかつたし、自ら解けえなかつた謎のような問題が靈界の事実であった。 ” と言われたことがある。李先生は ” この世界に来て、靈界の事実を詳細に整理し、地上に送ろうという理由として、①地上で生活しているすべての知性人たちの疑問を解いてあげたいし、②食口たちの地上での生を助けてほしいし、③御父母様の困難をここから少しでも軽くしてさしあげたいからであるし、そして、④(靈界に)先に来た罪責感のためであると、その理由に対して説明している。

李相軒先生は知性人たちに、「靈界の生」に対する研究をしなければならないと切に願った。 ” 知性人たちには、自身の專功分野も重要であるが、靈界の生を研究しなければならないと伝えてほしい。ここ靈界では、自身の專功分野や自らが積んだ知性が最高であると誇ったからといって神様の前に出ることができないからです。<sup>24)</sup> ” と言われ、多く泣かれたという。

李先生が金英順女史を通して送られた靈界メッセージは大きく二つに分けることができる。すなわち、靈界から見た生と地上生活の報告書、統一原理セミナーと決議文の採擇と宣布式である。

## 2. 靈界から見た生と地上生活の報告書

### 1) 統一思想は根源的な思想である。

まず、統一思想はアボニム（文鮮明先生）が我々に下さった根源的な思想である [25](#) と言われ、"私は地上から靈界に来たが、真の御父母様の思想を接ぎ木させること以外には関心がない。それは真の御父母様の思想よりもさらに次元の高い思想はないということを悟ったからである。 [26](#)" と言われた。

自宅で家族たちとの追悼禮拜の時、"おまえたちが執着している世界は瞬間の世界であることを肝に銘じておきなさい" と言われたし、"天の世界はあまりにも膨大であり、表現する方法、表現能力がこの父親にはみられない。" と言われた。"神様は見えないだろう。こちらのこの国でも神様は見えない。しかし、あの太陽の光彩よりもはるかに明るいこの燦爛とした光、恍惚とした光は人間の頭脳、知性、理性をもってしては表現する方法がない。" と言われた。すなわち、無限に膨大なこの靈界、とうてい知性をもって判断できないし、肉眼ですべてを見ることができず、とらえることもできず、# 498;明できない無限の世界の主人公がまさに神であられ、神は分けられず分析されもしない無限の光の主人公であられ、輝煌燦爛たる光によって人間を 奥妙に攝理されてこられた方である [27](#) というものであった。

お！私の神様、靈界に来れば神様を分析できるだろうと期待した。ところが、靈界に来てみると、あまりにも膨大であり、感歎詞だけが連發して出るだけであり、分析しようとする私の思考が無限に愚かに思われるだけです。

お！私の神様、この息子をお許し下さい。何事もいかなる所にも比較できない神様であられます。 [28](#)

李相軒先生は、"今後この膨大な靈界の姿を論理的に體系的に整理し、この(金英順)婦人に伝えます。私がここに来た以上、気がかりであった無形世界を教授社會に 綿密に教えます。" と言い、"靈界は目に見える現象世界とまったく同じようだが、靈界のその膨大な規模が地上とは比較になりません。" と言われた。すなわち、われわれが執着している世界は何でもない瞬間の世界であることを肝に命ぜよ [29](#) と言うことであった。

### 2) 靈界から見た天國と地獄

靈界人は地上生活をもとにして自らの生の位置が決定される [30](#)。一カ所に位置が定まれば、特別な恩恵がない限り千年過ぎてもその位置で生きようになる。

靈界では天國、地獄、樂園、中間靈界などがある。天國には階層がないが、天国以外のその他には種々雑多な階層がある。地上の生を通して定められた靈界の位置が平安な位置にある人たちは、後孫たちも平安に生きている。しかし、地上で自身の生が 誤った人は、靈界に来て地獄など、不便な所で生きようになり、後孫たちもいつも大変で問題が生じる。すな

わち、地上で善の生活、悪の生活の基準にしたがって靈界で自ら行くべき永遠の場が定められるのである。

天国については、天國というのは、思いと行動がそのまま1つになる所であり、寶石よりも明るい光體がいつも周囲にあるが、その明るい光體の為にお互いの困難を隠しあえず、お互いが読みとりあうので、目でもって心でもってすべてわかりあうようになる所である。また、天國はいつも心が平和にならざるをえない所であり、不便なこともなく、お腹がすいたこともない所である。天國はまさに明るく、愛の至聖所である。愛以外になく、神様の創造目的の根本をすべて成していく所である。天國は安心して通う自由がある。天國というのは、愛をもって1つの塊となったままその場にかなって生きていくので、何らかの気がかりや心配というものがありえない所である。夫婦の愛が神様を中心に愛と美を授受しながら生きる美しい所であり、3 対象目的の基準をすべて捧げる所である。天國は神様の子女であることを認定された者たちが集まった所である。相手のためにしようとする心、無限に与えようとする心が充満した共生・共榮・共義主義の世界である。神様を中心にわれわれすべて似た者同士がお互いに愛によって1つになった垣根である。いかなる困難も羨みさもない永遠に幸福な所である。

これに反して地獄は、神の根本理論をまったく理解できない所であり、愛に背いた所、愛という文句が目も出さない所である。お腹がすき、疲れてだるく、猜忌、嫉妬、不便なことがあまりにも多い所であり、いつも疲れてだるいため争うこと以外にすることがない、すべて不便だから、いつも不幸な姿をしている。地獄は自らの思い通りにできるものが1つもないところである。思うようにいかないから人のものを奪っていき、隠して食べる。地獄は愛をすべて度忘れしたままそれが何なのかもわからない世界で生きる所以、争い、気がかり、心配、不平、不満のテトリーでくるくる回っている。地獄は、私個人と私の事情と私のものにのみ執着する者たちが集まった所である。このような性向をもった人間たちがいく世界である。

中間靈界は、地上の自らの苦勞と功績はあるが、信仰と関係のない者たちが多く集まった所である。あたかも地上生活と似かよった姿が多かった。神と宗教に対することは關心すらない所である。そこでは様々な階層が多く、統一思想を理解させるのに困難であり、原理も神も理解させがたい所である。

樂園は、様々な国々の人々がグループを形成して生活するように、よく通じあう人たちが集まって生活している所である。

### 3) 靈界人と肉界人の生活

李相軒先生は地上生活の重要性<sup>31)</sup>を強調された。

まず、真の御父母様の地上生活は多くの子どもたちに福を下さる期間である。地上生活は人間が靈界に来る前に自らの生をどのように生きてきたのかという生活それ自體がここ、靈界に記録されていく過程である。靈界人は地上生活を基本にして自らの生の位置が決定される。

次に、靈界人は肉體的な制約がないために、自らの活動範囲が無限である。自らの本能が考えようとすると同時に、この考えようとするやとすぐに相手方に伝達されるので特別な言語

表現が必要ないのに反して、地上人は限定された空間の中で、限定された時間の制約を受けて生活する。

また、靈界人は靈界の世界で制約する妨害物がないので、無限に自由である。衣食住の問題のために神経を使うことがないので、無限に明るく謙遜である。地上で善の生活、悪の生活の基準にしたがって靈界で自らが行かなければならない永遠の位置が決められる。

この国にはみずから解決する罪の蕩滅方法はない。靈界法に一度ひっかかると容易に解くことができないし、ここ、永遠の国に来てまた苦勞するようになる。そのために李先生は、永遠の生のために瞬間の苦勞を避けないでほしいと願っている。常に永遠の世界に焦点を合わせて生活をするか、地上の生を整理しながら生きる生が賢明な人間なのである。地上生活における最も充実し生きがいのある生、私の基準を神を中心として生きることであるとされた。

李先生が最後に下さったみ言葉は、" 靈界法は地上のように値引きが全くない。だとすれば、この法度にひっかからない基準は、天上の生でなく地上の生である。常に靈界の生を準備する心をもって … 私が行かなければならない靈界はどこであるのかという心をもっていきなければならない。万一、この法度から離脱されれば、私の靈魂が行かなければならないのは、天道にしたがってそのまま畏にかからざるをえない。だから、地上の生をよくいきなければならない。 " と言うのであった。

#### 4) 原理から見た靈界の生

これまで靈界に対する多くの報告があった。しかし、それらは単純な靈界報告にすぎなかったが、原理から見た靈界の報告は李相軒先生の報告が初めてである。

まず、主體と對象が互いに与え受ける授受作用の力が萬有原力であり、萬有原力の 根本になった力の主人公がすなわち神であられる。われわれ人間が存在するのに必要な根源となった力の主人公が神であられるので、神を自分の心のなかに侍って生活しようとする思考意識をもつようになれば、主體の力をそのまま受け、對象にも同じような力によって反映するようになるのである。靈界法は断固として許しがないため [32\)](#)に、我々すべては永遠のために瞬間をよく飾らなければならない。

次に、3 對象目的はわれわれ人間が神から創造されたとき受けた神の貴い祝福であり贈り物である。これは人間が神の前に出るための前提条件として生じた原理である。夫婦は地上で生きていく間、3 對象目的を中心とした神の真の愛によって完全一體となる生を生きなければならない。地上におられる真の御父母様は、地上だけの真の御父母様だけでなく、天上天下の真の御父母様であられるので靈界の永遠の安息の主人、天國理想の主人公になられる [33\)](#)。4 位基臺の完成はすなわち、天國理想の完成であり、天國理想の完成は真の御父母様の前に孝行することである。すなわち、4 位基臺は神の窮極的な目的であり、神が力(愛によって運行しうる基盤) となり、根本的な力(愛) の基台となるのである。

最後に、人間は神の最高の傑作品であり、神が本来付与された為に生きるという天道にしたがって生を生きるようになっていく。 [34\)](#)人間は愛の中心存在であり、愛の媒介體であるために、神を喜びの場に招くための最善の生を生きなければならないのである。神の前に本然の真の愛によって導かれていこうとすれば、真の御父母様から祝福を受けた夫婦が愛を通して祝福家庭なし、子女を繁殖し、4 位基臺をなさなければならない。本然の愛の世界は神を中

心として夫婦があたかもやや温かい春の日のように、神の恍惚たる光のなかで興に乗って踊り、互いに授け受けようとする心をもって生きていく世界を言う。天地萬物を創造された神は、全被造世界の主人公を、人間をつくられたために神の子女として、そして被造世界の主管主として人間は神の前に無限の喜びの対象として立つようになる。つまり、完成した人間は神の相續者<sup>35)</sup>となるのである。

### 3. 統一原理セミナーと決議文の採擇及び宣布式

国連本部を初めとして世界各地、すなわち、地上で世界平和の確固たる基盤を備えた基盤の上に文先生ご夫妻は 2001 年 10 月 14 日、靈界のすべてのダムを撤廢し、特に宗教圏を統一できる靈界解放式を宣布された。

その後、イエス様を初めとした 4 大聖人たちとソクラテス、聖アウグスチヌスらの 聖賢たちが參席する中で、'神は人類の父母' という主題で靈界セミナー(報告書は 2001 年 2 月 12 日~4 月 11 日)が始まった。そして、キリスト教、佛教、儒教、イスラム教など 4 大宗教圏及び神はいないと否定した共産主義の指導者各 120 人の統一原理セミナー(報告書は 2001 年 8 月 27 日~2002 年 5 月 9 日)を開催した。

続いて、世界的な言論人 12 人と米国言論人の代表 40 人の統一原理セミナー(2002. 5. 14~2003. 10. 12)が開催された。

さらに、攝理國の 7 か國、すなわち、米国の政治家(米国の歴代大統領 36 人、2002. 6. 8~2003. 8. 1)、韓國の政治家(高麗の歴代國王 11 人、朝鮮の歴代國王 2 人、大韓民國の大統領 2 人、2003. 10. 27~2004. 1. 26)、日本の政治家(天皇及び太子 2 人、政治指導者 40 人、2004. 2. 2~2004. 5. 7)、英國の政治家(政治指導者代表 12 人、2004. 6. 18~2005. 6. 22)、ドイツの政治家(政治指導者代表 12 人、2005. 7. 6~2005. 10. 15)、フランスの政治家(政治指導者 12 人、2005. 11. 12~2006. 2. 15)、イタリアの政治家(政治指導者 12 人、2006. 3. 22~2006. 4)たちに對する統一原理セミナーが開催された。

ここで見られる 120, 40, 12 数などは、神の攝理を勝利へと導いていくのに非常に重要な数である。

統一原理セミナーに參席した 4 大聖人と宗教人、共産主義者、言論人、政治家たちは決議文の採擇と宣布式を行った。その内容は大きく分けて次のように五つに分けることができる。

第一に、神様は人類の父母であられ、全人類は一つの兄弟姉妹である。

第二に、文鮮明先生は人類の救世主、メシア、再臨主、真の父母、平和の王であられる。

第三に、統一原理は人類救援のための平和のメッセージであり、成約時代の福音書である。

第四に、宇宙平和統一は真の愛を中心とし、超宗教、超國家、超人種闘 '為に生きる生活' を通して完成する。

第五に、靈界(永遠なる天上世界)は實存する。

「UN に送る神様のメッセージ」(2004. 8. 1. 0 時)で神様は自ら '人類の父母' であり、人類はお互いに愛し合わなければならないと教えられたし、また、国連の覺醒を 訴えられた。人類平和は武力によって解決できないので、"人類に特別に私の愛する息子、文鮮明先生、真



の父母を人類のメシアとして送られたので、その方を信じ、その思想によって一つになれ。  
”と強調された。

「李相軒先生が真の御父母様に捧げる文」(2005. 6. 22)では、李先生は ”まだレポートができていない國家の指導者たちは靈界メッセージ、原理講論、み言葉集などを毎日訓讀し、御父母様の業績などの報告を聴いています。しかしながら、未だに御父母様が願われる神様の王國建設の基準にはあまりにも及ばない”として常に申し訳ない思いであり、”今後、御父母様が願われた基準にこたえて神の王國の建設に總力を傾けていくことに邁進していきます”と誓われた。

## VII、終りに

本文で「医師たちの臨死体験研究と靈界論」について研究した結果次のような結論に到達した。

第一に、ムーデイ博士は臨死体験研究を通して、”科学の世界の中だけでは、死後の生命の証となるものは、見つからないだろう”と感じており、死の瞬間、”魂が入ってゆく多次元の世界があるという事が、徐々に、知的に人々に受け入れられるようになる可能性はある”と見ている。

第二に、リングとセイボム医師による、科学的にデータを収集し処理した二つの研究によって、臨死体験の存在そのものはもはや疑えないということが一般に認められるようになった。そして、この体験が、立派に科学的研究の対象になりうるということが、広く認識されるようになった。

第三に、アマトウゾ法医学者は神秘体験を通して「死」について、”死は通過点であり、一つの状態から別の状態への変化に過ぎない。私たちはが肉体以上の存在であることを深く確信するようになった”と述べており、また、”死は、十二分に自分の生を生きること、この一瞬一瞬を大切にすること、人生において一番大切なもの、つまり愛について思い出させてくれるものである。魂は永遠に生き続ける”と信じている。

第四に、E・キューブラ・ロス精神科医は、”神は無条件の愛であり、私たちに最も必要なのは、無条件で人を愛し、愛されることができるようにならなければならないことである。幸福に生きるとは、基本的に愛することを学ぶことを意味する”と主張し、自らの本来の仕事は、”死は存在しない。死とはただこの世から、痛みも苦しみもない別の存在へと移るだけのこと、すなわち、別の存在への誕生である”ということすべての人に伝えることだとしている。

第五に、靈界の事実を地上にすべて知らせるために靈界に行かれた内科医師であり、地上で統一思想を体系化された李相軒先生は、”統一思想が根元的な思想であり、真の御父母様の思想よりも次元の高い思想はない”と強調され、靈界のその膨大な規模が地上とは比較に

ならないため、" 今後この膨大な靈界の姿を論理的に體系的に整理し、気がかりであった無形世界を教授社會に綿密に教えます" と語られた。

李先生はまた、地上生活の重要性を強調され、" 常に永遠の世界に焦點を合わせて生活をするか、地上の生を整理しながら生きる生が賢明な人間なのである。地上生活における最も充実し生きがいのある生、私の基準を神を中心として生きることである" と言われた。

さらに、靈界の実相を原理的に分析された李先生は、真の御父母様の指示にしたがって ' 神は人類の父母 ' という主題で靈界セミナーを行い、統一原理セミナーに參席した 4 大聖人と宗教人、共産主義者、言論人、政治家たちは、①神様は人類の父母であられ、全人類は一つの兄弟姉妹である、②文鮮明先生は人類の救世主、メシア、再臨主、真の父母、平和の王であられる、③統一原理は人類救援のための平和のメッセージであり、成約時代の福音書である、④宇宙平和統一は真の愛を中心とし、超宗教、超國家、超人種的 ' 為に生きる生活 ' を通して完成する、⑤靈界(永遠なる天上世界)は實存するという内容の決議文の採擇と宣布式を行った。

#### <参考文献>

1. 세계평화통일가정연합 편, 『天聖經』(서울 : (주)현문, 2005).
2. 통일사상연구원 편, 『이상현 선생이 영계에서 보낸 메시지 영계의 실상과 지상생활』(서울 : (주)성화출판사, 2000).
3. 『이상현 선생이 영계에서 보낸 메시지 하나님은 인류의 부모』(서울 : 광일인쇄문화사, 2002).
4. 최준식, 『죽음, 또 하나의 세계』(서울 : 동아시아, 2006).
5. 立花隆, 『臨死体験』(上)、(下)(東京 : 文春文庫、2000)。
6. 레이몬드・A.ムー데이・Jr, 『かいまみた死後の世界』*LIFE AFTER LIFE*(東京 : 評論社、1989)。
7. -----, 『続 かいまみた死後の世界』*LIFE AFTER LIFE*(東京 : 評論社、1989)。
8. 케ネス・링그, 『いまわのきわの見る死後の世界』*Life at Death*(東京 : 講談社、1981)。
9. 마이클・B. 세이보ム, 『新版 「あの世」からの帰還 臨死体験の医学的研究』*Recollections of Death*(東京 : 日本教文社、2005)。
10. ジャニス・アマトウーズ, 『「死ぬこと」の意味』*FOREVER OURS*(東京 : サンマーク出版、2006)。
11. E・キューブラー・ロス, 『死ぬ瞬間』*On Death and Dying*(東京 : 読売新聞社、1998)。
12. ----- 『死、それは成長の最終段階 続 死ぬ瞬間』(東京 : 中公文庫、2001)。
13. -----, 『最後の真実』*ON LIFE AFTER DEATH*(東京 : 日本教文社、1995)。
14. C. G. ユング, 『ユング自伝 1・2』(東京 : みすず書房、1972)。
15. 帯津良一、幕内秀夫, 『なぜ「粗食」が体にいいのか』(東京 : 三笠書房、2004)

- 
- 1) C. G. ユング、『ユング自伝 1・2』(みすず書房、1972)。「記憶、夢、映像」の中の「幻覚」。
  - 2) レイモンド・A・ムーデー・Jr., 『かいまみた死後の世界』、19~20頁。(以下'ムーデー'とする)。
  - 3) 立花隆、『臨死体験』上(文春文庫、2000) 参照。
  - 4) 日本で刊行された臨死体験に関する研究は次の通りである。

中村雅彦、『臨死体験の世界』(二見書房、1991)。愛媛大学教育学部の社会心理学者が超心理学の視点から書いた。; 『人間終末の風景』(大阪書籍、1992)。著名な哲学者、心理学者、そして精神科医師が各々の立場からの臨死体験に対する講演集; Carl B. Becker, 『死の体験—臨死現象の探究』(法蔵館、1992)。超心理的な立場から書いた、など。
  - 5) 최준식, 『죽음, 또 하나의 세계』(동아시아, 2006)。
  - 6) 帯津良一、幕内秀夫、『なぜ「粗食」が体にいいのか』(三笠書房、2007)、219頁。
  - 7) ムーデー、前掲書、31-33頁。
  - 8) ムーデー、『続 かいまみた死後の世界』(評論社、1989)、15-43頁
  - 9) ムーデー、前掲書、7-8頁。
  - 10) ムーデー、前掲書、続編、80-88頁。
  - 11) マイクル・B・セイボム、『新版 「あの世」からの帰還 —臨死体験の医学的研究—』(日本教文社、2005)。
  - 12) セイボム、前掲書、340-342頁。
  - 13) ジャニス・アマトウーズ、『「死ぬこと」の意味』(サンマーク出版、2006)、13頁。
  - 14) E・キューブラー・ロス、『死ぬ瞬間 死とその過程について』完全新訳改訂版(読売新聞社、1989)。
  - 15) E・キューブラー・ロス、『死後の真実』(日本教文社、1995)、31、119頁。
  - 16) 同書、73頁。
  - 17) 同著者、『死、それは成長の最終段階 —続死ぬ瞬間—』(中央公論新社、2001)、335頁。
  - 18) 上掲書、161頁。
  - 19) 同書、56頁。
  - 20) 同書、15-31頁。
  - 21) 同書、98頁。
  - 22) 통일사상연구원 편, 『영계의 실상과 지상생활』 이상헌 선생이 영계에서 보낸 메시지, ((주)성화출판사, 2000), 29頁。
  - 23) 세계평화통일자정연합 편, 『天聖經』((주)성화출판사, 2005), p.941.
  - 24) 上掲書、21頁。
  - 25) 上掲書、41頁。
  - 26) 上掲書、82頁。
  - 27) 上掲書、43-46頁。
  - 28) 上掲書、108頁。
  - 29) 上掲書、44-45頁。
  - 30) 上掲書、63頁。
  - 31) 上掲書、64頁。
  - 32) 上掲書、93頁。
  - 33) 上掲書、100頁。
  - 34) 上掲書、110頁。
  - 35) 上掲書、125頁。